

## 医史学と私―遍歴の跡―

久志本 常孝

### 暗中模索の頃

医史学会の末席を汚してすでに三十年近くなるのだから、この道でもずいぶん古株になったものだ。だが、見方を変えれば、それはいたずらな馬鹿の積み重ねなのかも知れない。

永年、生物物理化学のような学問と取り組んできた私にとって、古く言い慣らされた学問と、現実求められつつある学問、研究との間に、思弁的に相当大きな間隙を感じてきた。静かに自己の内なるものの探究と、その完成を求めて選んだ私の学問への道が、必ずしも現実と合致しない肌触りだとは思ふ。

小・中学校時代を通じて学校で教わった歴史が、少なくとも私にとっては無味乾燥で、とても魅力を感じる余地など見出せなかった。強いて私と歴史的なことを結びつけたものがあつたとすれば、中学生の頃、剣道気遣いを自称していた私、剣豪や剣聖といわれる人達の伝記や事績―剣道史といった方がよいかも知れない―をまじめに追いかけたこと、少年を取ってから、それが日本の合戦史に変わり、古戦場を尋ね回ったことくらいである。

四十歳近くになって、古い医家である「わが家の歴史」にいささか関心を持ち、医学の歴史を模索するようになった。

富士川先生の『日本医学史』だけは、どうした風の吹きまわしか学生時代から折に触れ読ませていただいていたので、日本の医学の歴史の大綱だけは知っていた。しかし個々の史実を研究する方法論はもとより、皇漢医学や本草学などは近付き難いものであった。

その頃、私の慈恵医大では、医学史の講義を故石原明先生にお願ひしていた。先生が講義に見えた日に、何度かお目にかかり、不明なことなどをうかがう機会が持てた。先生は、たまたま私と同じく昭和二十年に学校を出入れ、同じ陸軍軍医学校の飯を食った間柄だった関係もあろうが、すぐに親しくなっていただけだ。

昭和三十五年に名古屋で日本医学会総会が催された。専門の方に演題を出したので参加したが、その帰り道に、先祖の地である伊勢に立ち寄ることにした。私の家は江戸時代には幕臣だったから、ずっと江戸住まいだったが、曾祖父も祖父も隠居後は本国の伊勢に帰った。彼らの墓参を兼ねて、古い祖先達の墓も探し、さらに神宮文庫の古籍を調べる心算であった。

私の家の医流は、永く神宮医方と称され、その典籍として十種類の書物があつた。すなわち『管蠡備急方』三卷（天文三年）、『管蠡草彙診抄』一卷（天文三年）、『家傳通外』二卷（永禄二年）、『一流大事法』一卷（永禄十年）、『五急活法』一卷（永禄十年）、『奥義集』二卷（年代不詳）、『医学色葉』一卷（年代不詳）、『服餌要集』一卷（年代不詳）、『山野集』二卷（年代不詳）、『藥林撰葉集』二卷（年代不詳）である。

最初の二書は、わが家の医術の中興、常光の著であり、他はその子常辰のものである。

神宮文庫を訪れ、来意を告げると、折よく外宮の禰宜をされ前館長でもあつた松木季彦氏と出会つた。松木家と久志本家は非常に近い血縁にあつたから、家のこともよく承知しておられたらしく、初対面の私を旧知のようにもてなしてくださり、司書に命じて、文庫に蔵されていた七書を出させてくださった。

この種の書物は本来わが家に無ければならないはずなのに、と考えながら頁を繰っていくと、その多くの奥書の所に、

わが家の九代目常周が書写した旨記されており、祖父が他の本に捺していたと同じ蔵書印があったから、祖父の手をへて神宮文庫に納められたのだろう。許可をもらって、二日掛りで全頁を写真に収めた。

先祖の墓の中でもっとも重視したのは、前に述べた常光のそれであった。伊勢市楠部町にある松尾山は、昔は久志本家の土地で、その山頂付近に常光の墓はあった。それが古くなった五輪であったことは、曾祖父常貞が弘化二年に参って確認しているから間違いない。しかし現実松尾山に登ってみると、付近一帯は県営の野球場用地のため開発中であって、常光の墓などは跡形もなく失なわれていた。慙愧の至りというほかない。もし数年前に訪れていたら、あるいは常光の墓を他所に移す手もあったらうにと、及ばぬ悔恨のみが脳裏を去来した。歴史は永劫に止まっている。けれども史料は恐るべき速さで散逸するものだ、ということをはじめて思い知らされた。

父子相伝が原則だったわが家の史料がたくさん巷間に流出しているはずはない。したがって医学史を勉強している人でも、さほど詳しくわが家の医流を知っている人も少ない。当然史料集めには課するに時を以てしなければならぬ。当初は系図の調査から手をつけはじめた。いくつかの医学史の書物には簡単な系図は紹介されていたが、いずれも間違っていた。そのことを石原先生にお話ししたら、それは是非医学史学会で話せとのことで、二、三度地方会に演題を出させていただいた。

当時の医学史学会は会員数が今日のように多くなく、出席された先生方はいずれも私などの年配からみれば長老の大家が多く、医学史以外の専門家も多く見受けられた。そして老大家に相応しく、新米の私などにも含蓄の深いアドバイスを与えていただけた。そして私の目にはこの学会の姿が大変エレガントでユニークに写った。今日まで末席に連なり続けえたゆえんは、この学会の雰囲気私の心にフィットしていたためと思っている。

史料集めに時間をかけている間に、皇漢医学や本草学の本を読んだ。その頃、曲直瀬玄朔の『医学天正記』が、一世の名医の診療簿みたいなもの、との世評に引かれ、臨床医学には縁がないのだが、是非とも手に入れたと思うようになって

た。とある日、神保町界隈の古書屋で写本を見つけた。あの時の一種の驚きにも似た感動は未だに忘れられない。そうとう高価ではあったが、ともかくわがものにした。

『徳川実紀』や『寛政重修諸家譜』などはわが家の場合必見だと思いついた。この種の書物は当時私のところには皆無であったので、他大学の図書館へ行った。しかしそれらはほとんどが研究室貸出しになっており、直接閲覧室で見るわけにはいかなかった。よく考えれば、仮りに閲覧が叶ったとしても、あの膨大なものを閲覧室で片っ端から目を通すのはたいていへんだと思った。

折よく河出書房から（新訂増補国史大系）の一環として『徳川実紀』および『続徳川実紀』が出版されつつあった。さっそく大学の図書館に頼んで（国史大系）そのものを全巻購入するよう取り計らってもらった。また同じ頃群書類従刊行会で『新訂寛政重修諸家譜』の希望者を募集していたので、こちらは自分で購入した。しかし全部が揃うのに足かけ四年の歳月を要した。

ともかく『徳川実紀』のたぐいは全巻に目を通し、医事関係の記事はすべてカードに書き出して分類した。退職のとき、かさばるため置いてきたので現在手許になく、正確な数は分らないが、二千枚近くあったと思う。また『寛政諸家譜』にある全医家の系図と主要記載事項のリストを作った。これらは当時私が持ち合わせた医史学領域での主戦兵器であった。

昭和四十八年、成医会総会で行った「徳川幕府における医師の身分と職制について」と題する特別講演は、前述兵器のほんの一部を使って対応したものである。

徳川幕府の医事制度史に關しては、早くから山崎佐先生や、藤浪剛一先生の研究があり、私の分類項目と重複する部分も相当あるが、依拠した文献が違うため、解釈は必ずしも一致しない。先輩達の研究の補遺や、自分の新しい知見を発表したく思っている矢先に、いわゆる学園紛争が熾烈化した。私は教学の衝に当たっていたため、過激派学生の対応に自分の

時間を作る余裕もなく二、三年を過してしまった。

### 東京慈恵会医科大学百年史編纂の頃

昭和五十年の某日、故樋口一成学長が突然私の室に来られ「久志本、お前慈恵の百年史を書けよ」といわれた。

この種の歴史には、えてして編者の意図と無関係な雑音に悩まされることがあるので、私は学長に「先生から何か御要望でもおありですか」と単刀直入に聴いてみた。すると学長は「お前が思う通り書けばいいよ」と誠にさりげなくおっしゃった。学長のお墨付きをもらったわけで、私は「光栄な仕事ですからお引き受けしましょう」と答えた。

かつて故石川光昭教授が七十五年史をまとめられた時には補助委員、故赤羽武夫教授が八十五年史を作られた時には編纂委員をした関係で、慈恵の歴史は自分なりには知っている積りであった。

創立百年までには約五年間の余裕があったが、すでに八十五年史を世に送っているだけに、ただ残りの十五年分の追加では能がなさすぎる。やはり斬新なものにしたいと考えた。

しかしこのような仕事を大勢ですると、おおむね「船頭多くして船山に登る」の弊なきにしもあらずなので、自分一人の編纂も考えてはみたが、やはり編纂委員会だけは組んだ方が客観的によいと判断し、自分と親しく、文化的素養の豊かな四名の教授に委員をお願いした。そして教室史以外の全草稿を自分が書くから、各委員はその草稿に加筆修正等だけをしてもらえるよう了承を取り付けた。

整理・整頓の不得意な私は、当時住んでいた西鎌倉の家の客間を作業場にした。机のまわりは資料や原稿が散乱しっ放しだったが、家族には手を触れることを禁じた。仕事が済んだ後、紙の散らばっていた部分の畳は歴然と青畳のままであった一駒もあった。

苦心したのは何といつても学祖高木兼寛の扱い方であった。学祖ともなると、私学の場合尊敬のあまり史実を曲げてしまふことがある。慈恵の歴史に、もしそのようなことがあれば万難を排して、その訂正をしておかねばならないと考えた。たとえば高木兼寛の脚氣予防の問題などにも従来その嫌いがあつた。私は永年生化学をやつた自分なりに、「高木兼寛と脚氣予防」と題する一文を、あえて文筆責任を明示して付け加えた。

高木兼寛とイギリス医学の關係を一途にウイリアム・ウイリスに帰する考え方が従来は普通であつたが、高木をイギリス、とくにセント・トーマス医院医学校に結びつけたのは、海軍医務局学舎のお雇ひイギリス人医師ウイリアム・アンダーソンであることを指摘したのは私の新説だと思つてゐる。

また八十五年史では、創立者の陰にかくれてほとんど目に触れることのなかつた、初代の金杉英五郎学長の顕彰がある。大正十年、大学に昇格以後昭和十七年の逝去まで、二十年以上も学長の職にあり、関東大震災後の大学の復興を考えると、金杉学長の操舵は正に大学としての慈恵そのものの歩みとさえいえると思つたからである。

もうひとつ意外なところで苦労した。それは終戦後二、三年の問題であつた。百年の歴史の中のたかが二、三年ではあるが、国そのものの大変動時期だつただけに、一私立の医科大学も、それなりに、その改革の歴史的意義は大きい。だがあの社会の混乱に物資の欠乏が手伝つたせいもある。教授会や理事会の記録が皆無に近かつた。やつとのもので、反故同然でタイプ・インクも薄くなつてしまつた一綴りの記録が見つかつた。それは当時過渡的に存在した協議会というものの記録であつたが、その発見により辛くも難所を切り抜けることができた。全一〇七六頁、内教室史一九五頁だから、八八二頁分の草稿を自分ひとりの手で書き上げた満足感は忘れられない。しいていへば締切りは定まっていなかつたのに、突然理事会から百年記念式典に間に合わせて欲しいとの要望があり、本来付加すべき索引をつけなかつたことが少し心残りといえる。

## 神宮医方史

慈恵医大の百年史が完成した昭和五十五年は私の還暦に当った。永い間寝かせておいた「わが家の歴史」をまとめるよ  
いタイミングであった。しかし、前の仕事がそうとう重かったので引き続きというわけにもいかず、五年後の停年退職の  
時を選ぶことにした。

全体をまとめる上で、わが家が医家を兼行しはじめた平安以前の歴史をも加える必要が生じた。この問題はおのずから  
『記紀』の世界への遡行を余儀なくする関係で、これをごく自然に取り扱うためかなり骨が折れた。ともあれ停年退職直  
前の昭和六十年二月に『神宮医方史』と題する四三〇頁ばかりの一書ができ上った。私家のことだけに、自費でとりあ  
えず千部刷り、その七五％は全国の大学や主要な図書館へ寄贈した。

医学史の領域のみならず、一般の史家も利用して下さっているらしく、四年後の今でも、時たま書物を希望して来られ  
る方がある。そして、日本にはこのような流儀の医学が存在したことを、あらためて確認していただけるならば、父祖の  
霊に対し、医者 of 端くれの末孫として何とか面目が立った思いになれるのである。

医学史の本を読んでいるとしばしば名医という言葉にお目にかかる。中国書ではとくに著しい。両国の言葉のニュア  
ンスの問題でもあろうし、歴史に名を残したほどの医者だから、といえはそれまでのことである。しかし医は実学である  
という観点を踏まえるならば、名医たるものの条件はおのずから定まる。本当の名医なのか、単なる流行医なのか、それ  
も医学者であるのか等を明確にしておかないと医学史そのものが歪んでしまう可能性すらあると思う。なぜなら、今日  
もそうだが、著書の量と医療技術とは、必ずしもよい相関にあるとはいえないと考えられるからである。

たとえばわが家の中興常光は『管蠡備急方』と『管蠡草灸診抄』の二書を著わしたことは前にも記した。彼の医名は

勢、尾、信の三国に広まっており、入門希望者は踵を接したようだが、自ら書物を残す意志など余りなかったようである。たまたま入門希望の片切左近源頼為と交わした言葉のあやで、自らの医方の骨子を口述筆記させる破目になっただけである。だから彼は少なくとも優れた臨床医家であったに相違ない。

以下は私の不勉強での見落したが、昨年の春、『神宮医方史』を求めて来宅された客人から、三重大学の松島博氏が、同大学教育学部研究紀要、第二四巻、第二号（昭和四十八年）に、「久志本家（神宮家）の医学について」と題する詳細な論文を載せておられることを聞き、さっそく内容を詳読した。その中で氏は常光の『管蠡備急方』に触れ、「傷寒論が漸く日本に伝わったばかりの頃、傷寒論や金匱要略をよく読みこなし、しかも近世的感觉を以て医説を立てているところにその卓越さがある。しかも彼は京都とか文化の中心をなした都市でなく、山田に住して、これだけの医学の卓説を立てたのである」と賞賛しておられた。この部をかりて松島氏の御勞苦に敬意を表ささせていただくことにした。

さて、息子の常辰は父に三倍する医書を著わしたが、病人を治す腕が父を上回ったと考えられる根拠は見当らない。もちろん診療をしていた記録はある。そうすると彼は医師というより医学者の色彩の方がはるかに濃い人物だったことがわかるのである。

### 昭和六十年以後

昭和六十年三月三十一日付、私は四十年勤めた慈恵医大を停年で去った。現職の終りの十年間は大学の理事だとか進学課程長といった大学の管理サイドに置かれたから、家で細々と皇漢の医学や本草学の書物を読むくらいだった。したがって停年になったら思う存分好きなことをしようと思しみにしていた。

さっそく、古本草と検量問題のふたつをテーマに二年間ほど、夜を日についでしゃにむに頑張った。色々と整理もし、

何とか自分なりの結論には達したものの、とても人様にお話しできるような代物ではない。まったく奥が深く、日暮れて道遠しを地でいった感じである。

医学史とか皇漢の医学は、日本の医学の明日に向って真実の方向と新しい着想の源となってくれる道標と考えている。しかし大学にいて、同様に考えてくれる人が意外に少なく淋しい思いをしてきた。先輩の大滝紀雄先生も、後輩の深瀬泰且さんもおそらく私と同じような気持だったのではなからうか。ただ私は教職にあったから、時あるごとに学生達には自分の考え方を話してきた。

ひとつの学問を盛んにするには、場作りが必要なのである。

だいぶ前のことだが、慈恵の図書館の片隈に埃にまみれた、未整理の一群の和綴本を発見した。息を殺して埃を払いながら、一冊一冊改めていくと、希観本などはないが、一応は皇漢医学の有名な書籍がたくさんあった。当時理事をしていた関係で、それらを掘り起こし、閲観に供せるようにする了承はすぐに取りつけられた。また私がそのような仕事をしていることを聞きつけ、その後大量の書籍の寄贈もうけた。現在約四百種ほどの和綴医書が集まっている。阿部正和学長も私の計画に賛同して下さっているから、近い将来、特別の閲覧施設の実現も可能と思っている。しかしいい出し人の私が何もしない訳にはいかないので、とりあえず目録を作ることにした。

目録といっても、ただ書名の羅列ではつまらないから、素人にも興味を持ってもらえるように、解説つき目録の形式とした。

それは昨年三月にでき上った。最初に手がけた百種ばかりの目録だが、『東京慈恵会医科大学医学情報センター図書館古医書目録 一』という、ちょっと気の利いた本だと自画自賛している。二、三と続篇が出るわけだが、二は、いまだ整理中である。そんなこんなで停年後はけっこう忙しく、いささか頭が疲れたので、気晴しを兼ねて、若い頃から夢だったパリの屋根の下の生活を二ヵ月ばかり味わうことにした。文芸や美術には音痴だが、パリそのものが、もっと広い文化の

固まりだと考えていた。

工学士でもある私は、昔とった杵柄で瞬く間にフランスの生んだ大数学者や大物理学者の虜になり、彼らの足跡を追いまわす結果となった。おかげで、たった二カ月の滞在ではあったがパリ二十区、足を踏み入れない区はないほど歩いた。今年もう一度三ヵ月ばかり行くが、その夢から醒めたら、またいままでの貯蓄を生かして、自分の医史学の内容を深めていきたいと思う。

(日本医史学会評議員)